
化石ドラッグ

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化石ドラッグ

【Nコード】

N9772E

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

荒野を疾走するジャンキーたちは、光で会話しドラッグで音楽を奏でる……。この小説は、『空想科学祭2008』に参加しています

第1話

……空間と時間とは擬設^{フィクション}である　　という大いなる観念を、僕は身をもつて体験しつつある。僕はあらゆる世紀に生きている。僕は空間を絶した所に生きている……

（ガルシン『あかい花』より）

酸化鉄と廃プラスチックが堆積した大地に、水素イオン指数5つ星のどす黒い霖雨^{りんう}が、まるで歌劇場^{オペラハウス}の拍手喝采^{オベラハウス}みたいに叩きつける。

曇天に充ちる、電磁波と哲学者のため息……

白骨の上に咲いた一輪の天竺牡丹^{タリヤ}は、その鬱血^{うっけつ}した赤を、宇宙からの青い吐瀉物に晒して光合成しようと試みた。

だめだ……

もう久しく、鳥も飛んでいない……

環境保護団体のバッジをつけた偉い科学者が、ユダヤのヘロデ王さながらに嘆きの天使を仰ぎ見て敬虔な祈りをささげたあと、天空をななめに横切る白いカラスを確かに見たと言ったらしいが、それはきつと、場末の売春宿でヴァイオリンの弾き語りをするジプシーたちの作り話だろう。

いずれにせよ、子供たちが違法薬物のカクテルソースを静脈注射^{シヨット}している間に、青い海原も、緑の森林もきれいに消え失せ、地球は、いつの間にか重度の皮膚癌におかされてしまったのだ。

沙漠に降りそそぐ夕立は、まるで女の涙のよう……すぐに乾

いてしまう。

酸性雨の去った灼熱の荒野に、野獣の咆哮がこだました。

退廃と紫外線のテーマパークで、混沌を体现する瓦礫がれきのオブジェ

……

かつては、万全のセキュリティに守られたその鉄筋コンクリート製粗大ゴミに獣じみたディーゼルエンジン音を反響させ、サバンナを疾駆するゼブラしながら派手にペイントされた4台のサンドモータービルが、そのキャタピラーでダイオキシンを含んだ熱砂を巻き上げながら突っ走っている。

操縦するのは、赤や黒のレザースーツに純銀製のロザリオを提げ、ギリシャ彫刻じみたアンテナが突き出たフルフェイスのヘルメットをかぶる若者たちだ。

今、地球の気は、かつての半分も酸素を含んでいない。だから彼らは、みな液体酸素の入った【ランドセル】を背負っていた。

この【ランドセル】から伸びるポリエチレンのチューブが、彼らの気道に直接、高純度な酸素を注ぎ込んでいる。

腐った大地は、ジャンキーたちの溜まり場になった。

その肉体は、処女にして神の子を懐胎した聖母のように早熟

……

その精神は、菩提樹の下で悟りを開いた修行者のように未熟

……

ただ、快楽が……、快楽だけが、ゴルゴダの丘で処刑された聖者のように、燔祭に捧げられる子羊のように、純然たる至高の極致に達していた……

若者たちは、この酸素ボンベに微量の神経伝達物質を混ぜていたのだ。

今、4台のサンドモーターに分乗するジャンキーたちが、お行儀良く背負った【ランドセル】のアダプターには、「メトキシジメチルトリプタミン」を充填した黄褐色の液体カプセルが装着されていた。

この覚醒物質は、脳内のセロトニン作用を増幅させ、極度の多幸感と大音量の幻聴によって、使用する若者たちを壮大な夢の世界へといざなう……

ドラッグによる疾走感は、^{ミュージック}音楽だ！

脳内におけるニューロンの混乱が、ありもしない幻の音楽を奏でる。

今この時、トリプタミン系ドラッグによる快感は、彼らの昂揚する神経中枢を、重厚なフルトヴェングラー指揮によるベルリンフィルと千人を超える大合唱の織りなす壮大な音楽叙事詩へといざなっていた。

歓喜に充ちたその曲の名は、『ベートーヴェン交響曲第9番 第4楽章プレスト』

独創的なフーガとソナタの融合、生命への歓喜に満ちた主題を繰り返すモルト・アレグロ……。

このドラッグに身を委ねるジャンキーたちの、ある者は、射精し、またある者は、オルガスムスのため背を丸めて瘦躯を痙攣させた。

地平線のかなた、蜃気楼が砂上の楼閣を逆さに映し出す……。

不意に、1台のサンドモータービルが干からびた大地に弧をえがいて急停車した。

残りの3台がこれに気付いて引き返してくる。やがて、停車した1台を、他の3台が取りかこんだ。

アイドリングするディーゼルエンジンの熱気が、陽炎となって殺風景な視界をゆがめる……

突然、若者たちの頭上に、原色じみた赤や緑の光線が複雑な図形を描きはじめた。それは、毒々しい夜の繁華街に点滅するネオンサインのように、あるいは恒星の外気をおおう電離層に荒れ狂うプラズマのように、色とりどりに、縦横無尽に、芸術的ともいえる光線の聖刻文字^{ヒエログリフ}をきざまながら明滅した。

彼らは、会話しているのだ。

気管内を、エアウェイのチューブでふさがれ発声する事ができない彼らは、脳波から読み取った信号を、ヘルメットに取り付けた電極から放電される光のオブジェに変換することによって、他者とのコミュニケーションをはかる。

「おい、【保健委員】、どうしたんだ？ 急にとまったりして」

「ごめん……、でも、あれを見て」

【保健委員】と呼ばれた少女は、かつてハイウェイを支えていたであろう、パルテノン神殿よろしく整然と立ち並んだコンクリート支柱のかげに、うち捨てられたマリオネットのように横たわる人影を指さして言った。

それは、カーニバルの踊り子が着るスパンコールの衣装みたいな銀色のボディスーツに、太陽光をきらきら反射させている。

「人だな……、生きているのかな……？」

「環境省の調査員でも遭難したか？」

「……ちよっと、行ってみるか」

4台のサンドモータービルは、獲物に群がる鯨のように、横たわる人影に近付いていった。

間近で見ると、それは美しい女性だった……

「息はあるか？」

「……だめ、とても弱いわ、もう死にそうよ」

【保健委員】が、純銀のロザリオを揺らしながらゆっくりとかぶりを振った。

「どうするよ【学級委員】、保安警察せいかつしとつを呼ぶか？」

「ばーか、今日は、5月1日だぞ！ 警察官やつち、今頃あの国民を見下したような威圧的な制服を着たまま、『賃金ベースアップ要求！』とか何とか書かれた横断幕を掲げて団体交渉権行使の真っ最中さ。俺たちのような社会のゴミに構ってるヒマなんかあるもんか」

【学級委員】と呼ばれた少年は、大袈裟なジェスチャーで肩をすくめて見せた。

「じゃあ、どうするよ？ このまま、ここに放っておけていうのか？」

「そんなこと言うなら【体育委員】、お前がステーションまでかいで運ばばいいじゃないか」

「この車じゃ無理だよ、4輪で来なきゃ……」

【体育委員】という名の大柄な少年が大きくかぶりを振ったとき、

【保健委員】が不意に叫んだ。

「待って。……この人、何か喋ってるわ！」

横たわる女の頭上に、弱々しい光線のメビウスリングが図形を描きはじめた。それは、若者達が普段使わない、見慣れない言語だった。

「おーい、これって、どこの国の言葉だ？」

「あん？ 見たことねえな……。おい【図書委員】、お前知ってつか？」

小柄で、頭でっかちの【図書委員】は、しばらくその光の明滅を見守っていたが、ふと思いついたように言った。

「……これは、きっと機械語ですよ。プログラミングするときを使うやつ。たぶん、第6世代言語の改良型でしょう。ほら、中等科の情報処理実習で教わったでしょ？」

「ばーか、授業なんて、マジメに受けたことねーよ」

「でも……。そうすると、この人はアンドロイドとゆーことになるのでしょうか？」

「ばーか、アンドロイドは、月にしかいねえって……」

「ねえ【図書委員】、この人なんて言ってるの？」

【保健委員】の問いかけに【図書委員】は、横たわる女の前にしやがみ込み、その光の明滅を見つめながら、たどたどしい言葉で通訳をはじめた……

女の言葉は、はじめ、安らぎを表現する【緑】だった。

はるか草原の中で見つけた……。ヒマワリの下で……。墜ちることなく朽ちる運命の……。そのタネを私たちは……。むしりとして地面に……

その【緑】に、徐々に悲しみを写し出す【青】が加わっていった。
黒い雨……。黒い雨が降り続いた……。雨は……。空を支配し……

笑い続ける……

やがて【青】は、次第に警告を強調する【オレンジ】へと変化してゆく。

肉を無くした……このカラダ……意識すらも残さずに……砂にまみれて骨を隠す……

【オレンジ】の次は、恐怖の【赤】だ。

唯一の救いは……夢を届けに空を飛ぶ……白いカラスだけ……月は空で笑ってる……

そして最後に女の言葉は、【真っ赤】な絶叫で終わった。

月が……、月がソラで嗤ってるーっ！

「月ガ……嗤ッテル」

その言葉を最後に、女の瞳から生命の光が消えた……

「おい、しつかりしろ。おいってば！」

「だめ、もう死んじゃったわ……」

「この人、何を言いたかったんでしょうか？」

「さあな……、お前の通訳が下手くそだから、ちんぷんかんぷんだ」

「背中に、銃創がありますね……」

「あっ、本当だ」

そう言って女の肩を抱き起こそうとした【学級委員】が低く呻いた。

「うーん、やっぱこいつアンドロイドだぞ……」

「マジかよ？」

「……だってほら、凄っげー重たいもん」

【学級委員】は、女の上体を半ば起こしたところで諦めて再び横

たえると、今度は、ボディースーツの上から体中をまさぐり始めた。
「ちよつと【学級委員】っては何やってんのよ、やらしいわね」
「ばーか、なんか身元の分かるモン持つてねーか調べてるんだよ」

女のボディースーツは、軽合金のような素材で出来ていてポケットのたぐいは見当たらなかったが、よく見ると、腰に巻いたガンベルトの弾倉収納ソケットに青いシャークスキンの手帳が突っ込まれていた。

「何だろう、これは……？」

手帳は、半分ほど焼け焦げてしまっていたが、裏側に貼り付けた金バッジが妙に威厳に満ちた輝きを放っていた。正五角形をしたそのバッジには、ピラミッドのような三角形の中央に光り輝く人間の目玉が描かれており、何とも言えないミステリアスな雰囲気を出している。

「……おい【図書委員】、これ何のマークだか知ってつか？」
「うん？ どこかで見たことあるなあ……」

【図書委員】は、ヘルメットのゴーグルを持ち上げ、その手帳を両手に取ってしばらく興味深そうに眺めていたが、不意にゆっくり立ち上がると不安気な眼差しを皆に向けた。

「これは……ペンタゴンの身分証明です」
「ペンタゴンだって？」

全員が驚きを表す【紫】で言った。

「ペンタゴンといえば、地球をさんざ破壊した挙げ句ちやつかり自分達だけ月に移住した、戦勝国人類圏の国防総省じゃねえか……」
「……とうの昔に地球を見捨てたあいつらが、今ごろ何しにやって

来たんだ？ 資源だっておおかた掘り尽くして、もうこの地球にはカスしか残ってねえはずだぜ」

「いい気なもんよね、先の戦争で負け組になったあたし達と大量の産業廃棄物を残して、自分らは、さっさと安全で資源豊富な月へと引っ越しちゃうんだもの……」

口々に、月に移住した戦勝国人類圏をのしる3人の会話を、【図書委員】が警告を表す【オレンジ】でさえぎった。

「……皆さんは、聞いた事ありませんか？ 地球には、戦勝国人類圏の残していった最終兵器が隠されていて、それをペンタゴンが秘かに管理しているという噂を……？」

「初耳だな……」

「最終兵器って？」

【図書委員】が再びゴーグルを閉じた。そのため、彼の表情は伺えないが、警告を表す【オレンジ】がさっきより濃度を増した。

「ソドムとゴモラを滅ぼす【天使の矢】です」

「何だ、そりゃ？」

「月を破壊できる兵器ですよ。先の大戦中に造られたらしいのですが……」

「ふーん……、でも、これから月に引っ越そうかっていう奴らが、何でまたそんな物騒なモン造ったんだ？」

「恐らく、彼らも100パーセント戦争に勝てる自信は無かったのでしょう。負ければ、月の居住権を我々に奪われてしまいますからね……」

「もしもの時は、負けた腹いせに月ごと吹っ飛ばしてやろうって魂胆か、けっ！ つくづく、あつたまくる奴らだな」

【図書委員】が、もう一度だけ女の死体を見て言った。

「このアンドロイド……、明らかに後ろから熱線銃で撃たれています。……もしかしたら、月で、何か争い事があったのかも知れませんがね……」

【図書委員】のつぶやきは、不安に満ちた【クリムゾン・レッド】だった……

つづく……

第2話

聖なるかな 聖なるかな 聖なるかな

昔いまし 今いまし のち来たりたまう 主たる全能の神

……

清らかな神霊の歌声で三聖^{トリスアギオン}頌を唱えつつ、神のおわす御座の周りをめぐる熾^{セラフ}天使たち。

予言者イザヤは、彼らの姿を仰ぎ見てこう表現した……

愛の原初の振動、
赤光に輝く稲妻の空飛ぶ蛇。

この炎の守護天使と自転する焰の剣に守られた、天上の国。
それは、かつてパラダイスを夢見た人類が大地^{ヘレト}からひたすらに虚空の塔を積み上げてもけっして届くことがなかった第七天^{アラボト}、すなわち大宇宙であった……

今、人類は、ようやく第一^{シャマイム}天である【月】に達した。

しかし、科学という名の剣で天界の地を切り取りはじめた人類は、同時にその両刃の剣で己の喉元をも切り裂こうとしていた。

先の大戦で勝利した戦勝国人類圏は、意気揚々、戦利品である月へと移住した。だが見捨てられた故郷はやがて地獄^{ゲヘナ}と化し、貶められた人たちは、憎悪と嫉視の入り混じった視線で天を仰ぎ見て呪いの言葉を放ったのだ。

父なる神の裁きは、厳かに下されようとしていた。
炎の剣を振りかざした、熾^{セラフ}天使たちの手によって……

「ねえ、ちょっと待って！ 誰かが助けを求めてるわ」

見ると、アイドリング中のエンジンが放つ熱気が陽炎となってゆらめくサンドモービルの上に、けたたましい【オレンジ】色の閃光が明滅しながら3つの正八面体となって高速回転していた。

彼らは、光で会話する。

4人は、慌てて車に駆け戻ると、眼前の空間に3次元地図を拡げ、仲間が襲われている地点をGPSが知らせる赤い点滅で確認した。

「うん、ここから割と近いようだな」

「早く助けに行きましょうよ」

多くの野生動物がそうであるように、荒廃した地上を跋扈するジヤンキーたちにも不可侵的な勢力圏テリトリーが存在した。ドラッグの世界に溺れる彼らは、総じて他人に無関心であったが、自分の属するグループが主張するテリトリーを侵すものに対しては団結して立ち向かったのだ。

当然、互いがテリトリーを主張する境界線付近では、小競り合いが日常茶飯となっていた。

「みなさん、ちょっと待ってください」

勇んで愛車にまたがろうとする3人を、【図書委員】が引き止めた。

「僕の調合した新しい幻覚剤ドラッグが出来たんです、せっかくですから、みなさん、ちょっと試してみてくださいませんか？」

そう言つて、赤紫の液体が充填されたカプセルをみなに手渡そうとした。

「えー、またかよ。お前の造った薬で、この前ひでー目に遭ったん

だぜ」

「お、俺は、あの時おまえがくれた薬のせいで10キロもやせたんだ……。何せ10分おきに13回も射精したんだからな……」

「そうよそうよ、あたしなんかもう、すっかりお嫁に行けない体になっちゃったわ!」

口々に不平を言う3人をなだめながら、【図書委員】が自信満々に笑って見せた。

「今度は、絶対大丈夫、僕の最高傑作ですから。みなさん、きっと夢の世界までぶっ飛ぶこと請け合いですよ」

3人は、不承不承にカプセルを受け取ると無造作にポケットへ突っ込んだ。やがて4人は、水上スキーのように砂塵を巻き上げながらサンドモービルを発進させた。

かつては、アスファルトと街路樹で上品に整備されていた街区が戦争による空爆で跡形もなく粉碎され、まるで巨大なトラクターが耕したあとのように掘り起こされ、粗い起伏を連ねていた。

クレーター、断層崖、干上がった河川……。

戦車やオフロードバイクでも満足に走行できそうもない道なき道を、4台のサンドモービルは、荒波と戯れるイルカのような軽快さでひた走った。

緩やかな丘陵を3つ越えたところに突如として戦闘の舞台は広がっていた。

すでに決着はついたらしく、数台の黒塗りサンドモービルが生き残った1台のゼブラ模様を追い回しているところだった。それは、すでに戦闘ではなく、多勢で一人を騁りものにして楽しむゲームである。

「たーいへん！ あの追いかけて回されてる娘って、【放送委員】よ。捕まったら、きっと奴らにひどい目に遭わされちゃうわ」

「うーん……、敵は、【ネオナチ】の連中か、イヤな相手だなあ」

「8人いますね……」と言うことは、1人につき2人倒さねばならないのでしょうか……」

「考えてたって仕方ないさ、行くぞ！」

【学級委員】の掛け声を合図に4台のサンドモータービルは、くだり勾配に乗って徐々に加速をつけながら一直線に敵のただ中へと突っ込んでいった。

ようやく狩の獲物を取りかこんで歓声を上げていた8台の【ネオナチ】は、突然現れた新手の敵に一瞬戸惑いを見せたが、日頃からしつかり訓練されているらしく、リーダーの男がさつと手を挙げると同時に、素早く逆V字型の戦闘隊形を整えた。

「よし、斬り込めっ！」

まず先に【学級委員】がタンデムシートに括り付けられた鞘から日本刀を豪快に抜き放つと、馬賊の首領さながらにそれを高々と振りかざして叫んだ。すかさず他の3人も【ルビーレッド】な喚声を上げながらそれに倣う。

振り上げられた4本の白刃が太陽光をぎらりと跳ね返し、プリズムのように7色に分解して煌めいた。

対する【ネオナチ】の8人も、手に手に、厚刃のクレイモアや鎖の先に凶悪な分銅をぶら下げたフレイルを振り回しながら、ハーケンクロイツが誇らしげにペイントされた大型のサンドモータービルを急発進させた。

爆音と砂塵を巻き上げながら急速に接近する両者。

その勇姿は、さながら回教徒の軍勢に挑みかかる蒙古の騎馬軍団のようでもあった……

激突は一瞬だった。

【赤】や【紫】の怒号と喚声がわき起こる中、甲高い金属音が鋭く交錯し、両者は、あっという間にすれ違って再び対峙した。

【体育委員】が敵の1人を殴り倒していた。

あとは【学級委員】が肩を斬りつけられ軽く負傷したのと、【保健委員】と【図書委員】が敵の攻撃をかわしそこねてサンドモビールから転げ落ちただけだった。

気丈にも【保健委員】は、すぐに立ち上がり態勢を立て直したが、【図書委員】は、固い地面をドッジボールのように転がったまま気を失った……

そんな様子を見て、【ネオナチ】のリーダーが嘲りの【黄緑】で笑った。

「よう兄弟！^{ブラザー} 有り金ぜんぶと薬……それに女もだ。全て置いていけば、命だけは助けてやるぞ」

「……ちくしょう、あんな奴らに」

「でも、多勢に無勢だ、とても勝ち目はねえよ」

けんか好きの【体育委員】が【青】い弱音を吐いた。

「きゃーっ！」

突然、【保健委員】が文字通り【黄色】い悲鳴を上げた。

「どうした!？」

「あたしの……、あたしのドラッグカプセルが壊れちゃった……」

【保健委員】が背負った赤い【ランドセル】のアダプターソケット

トに嵌め込まれていたプラスチック製カプセルに亀裂が入り、中に入っていた黄褐色の液体が漏れ出していた。彼女にとって違法薬物^{ドラッグ}とは、命よりも、友情よりも、そしてセックスよりも大切なものなのだ。一瞬たりともドラッグなしでは生きてゆけない……

「ねえ、どうしよう、どうしよう……」

「さっき【図書委員】から貰ったやつがあるだろ」

「えーっ！ やーよ、あんなの……」

「だけど、俺、予備は持ってねーよ」

「俺も」

最初、ためらいの【コバルトブルー】を見せていた【保健委員】だったが、やはりドラッグのない状態は1分たりとも耐えられないと思ったのか、さっき【図書委員】から手渡された赤紫色の液体カプセルを、恐る恐る背中の【ランドセル】に装着した。

「あ……！」

突然、【保健委員】の神経中枢を大音量のノイズが駆け抜けた。

^{ドラッグ}違法薬物による幻聴は、^{ミュージック}やがて音楽になる！

彼女の左右にうずたかく積まれた特大のマーシャル・アンプから、目一杯、ディストーションで歪ませたフルボリュームのギターサウンドが脳髓を殴打する衝撃波となって进り、反響し、そして砕け散った……

「……………超気持ちいいっ！」

次に、そのギターは、高速のハマリングとプリングオフを繰り返しながら怒濤のごとく超早弾きのペントニックスケールを展開し、

やがてクレイジーに掻き鳴らされた甲高い摩擦音が巧みなトレモロユニットの操作によってベ어링海の荒波のごとく長短に激しくうねるノイズへと変化した……

最後に、左右のアンプが共鳴して肉食獣ハウリングの咆哮を起こすと、【保健委員】は、瞳を裏返して1回目のオルガスムスに達した……

「お、おい、どうした……、大丈夫か【保健委員】？」

「やべーよ……、こいつ完全にイっちゃってるぞ」

休む間もなく、すかさず【保健委員】の脳天を、鋼鉄のスネアドラムと気違いじみたハイハットの連打による怒濤の16ビートが殴りつけた。心臓がマグニチュード8で鼓動を始める。両腕が、阿修羅のごとく6本になった……

「来た、来た、来た、来た、来た、来たーっ！」

【保健委員】は、悪霊に憑依されたエクソシストのように乱れ狂いながら日本刀を天空へ突き上げ、【ヴァイオレット】な絶叫をほとばしらせながら、敵の真っ只中へと突っ込んでいった。

「な、何だ？ 変な奴がこっちへ来るぞ……」

「ひるむな、たかが女1人だ」

彼女のただならぬ迫力に気圧されながらも、【ネオナチ】は、圧倒的な数の優位をたのんで、これを迎え撃つ態勢を整えた。

「くたばれっ、クソ女！」

【ネオナチ】の1人が、フレイルを振りかざして突進する。

彼女には、敵の攻撃が音楽となつて聞こえた。

鋼鉄製の分銅が、激しく回転しながらAマイナーの三連符となつ

て襲い掛かる。

彼女は、これを破瓜した処女の悲鳴じみた甲高いBフラット7の
チョーキングでかわすと、横殴りのグリッサンドで反撃してその首
を刎ね飛ばした。

「てめえ、やりたがったな！」

別の敵がGメジャー7のオブリガートで斬りかかる。

彼女は、マシガンのごときバスタームの連打でこれを弾き返す
と、カッティングを駆使したブルージーなギターリフと、けたたま
しいホーンセクションとの絶妙なシンクロによって敵をなますのよ
うに切り刻んだ。

3人目は、卑怯にも背後から無言で斬り付けてきた。

もらった！

しかし彼女は……このドラッグに祝福されたジャンヌダルクは、
背中にも目が付いているかのごとくこれをミュートして退けると、
振り向きざま、トレモロユニットの尖端をそのダイヤモンドの拳で
激しく叩きつけたのだ。

「何いつ！？」

超ハイテクニックであるクリケット奏法が生み出す歪んだビブラ
ートが、鬼神をも屈服させる百人の禅僧が唱和する般若心経のよう
に、天使に祝福された千人のウィーン少年合唱団が歌い上げる賛美
歌のように、波濤のごとく、暴風雨のごとく、大音量のショットガ
ンとなって敵の心臓に巨大な風穴をあけた……

「ぐわーっ」

血飛沫は、天地を焦がす放射能となった……

咲き誇る【ブラッドレッド】……

「あ……」

その顔いっぱいに振り返り血を浴びながら、【保健委員】は、2度目
のオルガスムスを迎えた……

残された5人は、恐怖の【深紅】をその顔に貼り付けたまま、電気ショックを受けたように金縛りになっていた。

【学級委員】と【体育委員】は、しばし啞然としながらそんな様子を見守っていたが、【ネオナチ】の連中がすっかり戦意を喪失したのを見て取ると、ディーゼルエンジン音を轟かせながら彼らに近付いていった。

「よう兄弟、ショーは楽しめたかい？」
ブラザー

「こつ、こつ、殺さないでくれ。頼むからあの女を止めてくれっ」
「ありや完全にイっちまつてるなあ……、このまま放っておくと何するか分かんねーぞ。取りあえず金と薬をよこしな、ぜんぶだぞ、ぜーんぶ！ そうつりゃ、もう暴れねーように頼んでやつから」
「分かった、全部やる、みんなやるから、もう勘弁してくれ！」

【ネオナチ】の5人は、チタニウム合金に人工ルビーやサファイアが埋め込まれた数種類のコインと、茶褐色や鼈甲色の液体が充填されたカプセルをばらばらと地面に放り出すと、民族の誇りであるハーケンクロイツが描かれたサンドモータービルにまたがり、脇目もふらず一目散に逃げていった……

「ひゃあ！ こいつは凄げえ、今日は、大漁だなあ」

大喜びする【体育委員】に戦利品の回収を任せて、【学級委員】は【ネオナチ】に襲われていた【放送委員】のところへ駆け寄った。

「おい、怪我はねーか？」

「う、うん……ありがとう……」

彼女は、うわの空で返事をする、その視線を興味の対象からそらさずに訊いた。

「……ねえ、彼女一体どうしちゃったの？」

【保健委員】は、激しくヘッドバンギングしながら踊り狂い、時折、大の字になってジャンプしたり地面にダイビングしたりしながら、「うりゃー」とか「ぎゃおー」とかいう絶叫をほとばしらせていた。

「今、ちょうどライブハウスの盛り上がりが最高潮に達してるところなんだろう。邪魔しねーでおこうぜ……」

そこへ、やっと意識を取り戻した【図書委員】が、腰をさすり、足を引きずりながらやって来た。

「ごめんごめん、すっかりやられてしまったよ……。ああ、でも、どうやら敵は退散したようだね」

「まあな……、おめーの造った違法薬物ドラッグのおかげだよ」

そう言いながら【学級委員】は、【ウルトラ・オレンジ】の溜息を吐いた。

「……でも、おめーの造った幻覚剤ドラッグだけは、決してヤルまいと心にかたく誓ったぜ」

つつく……

第3話

それは、例えるなら巨大なアリ地獄だった……

地面を広範囲に穿つスリバチ状のクレーターが、のぞき込むと吸い込まれそうなほど急な下り勾配となつて視界いっぱいに広がっていた。クレーターの中央には、逆立ちしたロケットが傾いた消火栓みたいに突き刺さっている……

「なんだ、こりゃあ……………」

5人の頭上で、驚愕を表す【ヴァイオレットブルー】が出来損ないのテトラポットみたいな象形文字となつてぐるぐる回転していた。彼らは、感情を光のオブジェであらわす。

「おい【放送委員】、これが、おまえたちの昨日から探していたものか？」

「……………うん、隕石が墜ちたらしいから探しに行こうぜって【文化委員】が言うもんだから」

「でも、これは隕石ではありませんね、明らかに人工の……………たぶん宇宙船か何かでしょう」

そう言ってから【図書委員】は、あつと叫んだ。

「うん、どうした？」

「……………あそこに人がいます」

【図書委員】の指さす先、巨大なアリ地獄の中心と縁のちょうど真ん中あたりに、小さくうごめく人影が米粒みたいに小さく見えた。ロケットの残骸から脱出した生存者であろう、必死に上へ這いあがろうとしている……

「よし、助けに行こうぜ」

気の短い【学級委員】が、すかさず愛車にまたがって指を鳴らしたが、他の4人は、まったく気乗りしないようで、口々に【メローイエロー】な言い訳をし始めた。

「あたし、もう体力の限界……。ねえ、男3人で行ってきなよ、あたし達ここで待ってるからさ。もしも遭難したときには助けを呼びにいつてあげる」

【保健委員】は、背中の【ランドセル】に装填する幻覚剤ドラッグを【放送委員】から貰ったアンフェタミンに付け替え、すっかり正気を取り戻していた。

「……このクレーターを下りていったとして、再び上がって来れる自信が俺にはない、デブだから……」

【体育委員】が、その布袋様のように張り出したタイコ腹をくると撫でてからポンと叩いた。

「先ほど転倒したときに腰を打ってしまったようです……。、ご苦労ですが【学級委員】お1人で行ってもらえますか……」

【図書委員】は、さも痛そうに腰をさすりながら言った。

「いいから、おめーら全員来いっ！」

【学級委員】の頭上で、怒りを表す【ブリリアントオレンジ】が閃光となって煌めいた。

「あわわ……」

「短気」

「鬼、人でなし」

声をそろえて【モスグリーン】な不平を口にする4人をむりやり従えて、【学級委員】は、意気揚々、砂煙を巻き上げながらサンドモービルを発進させた。

「おわあっ、真っ直ぐ進めねえ！」

「きゃーっ、ばかばかっ！ こっちに来ないでえ！」

「ハンドルが取られて危険です、みなさん、もう少し離れて走行して下さい」

5台のサンドモービルは、急勾配の砂地にキャタピラーを取られ悪戦苦闘しながらも、何とか目的の場所へとたどり着いた。そして救出すべき対象を間近で見るなり、5人は一様に驚きの【紫】で叫んだ。

「なんだ、子供じゃないか！」

アリ地獄に囚われていた人影は、年端もいかぬ少女だったのだ……

「おい、大丈夫か？ いま助け出してやるからな！」

【学級委員】は、急いでサンドモービルを飛び下り少女の元へ駆け寄ると、半ば砂に埋もれかけたその小さな体を両手で抱き起こそうとした。

「重い……。まさか、こいつもアンドロイドか？」

彼は、そつと少女の顔を覗き込んだ。そして、その美しさに思わず息をのんだ……

その、ターコイズブルーの瞳は、どこか空の高いところを見つめたまま、磨きぬかれた水晶のように透きとおっていた……

白磁のように艶やかな肌は、長時間、殺人的な紫外線に晒されていたにもかかわらず、まるで絞りたてのミルクで出来ているみたいに潤っていた……

輝くようなプラチナブロンドの髪は、セルロイドのように光線を透かしながら焰のように煌めき、高級なフランス人形みたいに可憐な容姿を形作っていた……

この人間離れた美しさは、やはり人造のモノだ……

少女は、その愛らしい瞳を大きく2回瞬く^{またた}と静かに視線をめぐらせ、やがて【学級委員】と目が合うと力なく微笑んで見せた。

「もう大丈夫だ、俺が助けてやつからな……」

少女は、ゆっくりうなずくと、頭上に色鮮やかな光線の象形文字

を描き始めた……

「おい【図書委員】！ この子、何か喋ってるぞ。お前の出番だ、早くこっちに来い！」

「またですか？ いやあ困ったなあ……。なにぶん特殊な言語ですから、僕の語学力で上手く訳せるかどうか……」

「ごちゃごちゃ言ってるねえで、早く来いってば！」

そのとき、自信なさげな【図書委員】を押しつけて、【放送委員】がずいっとピンク色のヘルメットをのぞかせた。

「ねえ、あたしに任せて！ こーゆーの得意なの。文部科学省が発行するライセンスだって持ってるんだから」

そう言う【放送委員】は、少女の横にぺたんと正座して、次々と形を変える光のオブジェを見つめながら通訳を始めた。

「ええと……。どうか私に力を貸してください……。月は、未知の病原菌に侵され滅びようとしています……。もはや助かるすべはありません……。だから月の人類は、地球の同胞を道連れにしようとしているのです……。彼らを止めるには月を破壊するしかありません……。そのための兵器がこの近くにありますが、どうか私をそこへ連れて行って……。だつて！」

そこにいる全員の頭上に、驚愕の【セクシユアル・ヴァイオレット】が閃いた。

「たーいへん！ ねえねえねえ、一体どーするのよ!？」

「お、おい、何かえらいことになってきたな……。一体どうするつもりだ？」

「これは、ゆるがせに出来ない事態ですね、どうするのですか？」

4人が、そろいもそろって【学級委員】の顔を見つめた。

「なな、何で俺にきくんだよー！」

「だって、あんた一応リーダーでしょ？」

こんな時だけリーダー扱いしやがって、と心の中で舌打ちしながらも、【学級委員】は、少女と目が合うと力強くうなずいて見せた。

「よ、よーし……心配するな、俺たちがその兵器とやらのある場所へ必ず連れて行ってやるからな」

少女は、そつと目でうなずき、天使のように微笑んでから空を見上げた。

熟れたトマトみたいな太陽が、雲の片鱗を燃やしながら瓦礫の輪郭で象られた地平線の彼方へと沈みはじめていた……

兵器が隠されているという場所は、できの悪いイスラームのムスクみたいな建物だった。

それは、かつてベンチャー企業が金に飽かせて造らせた巨大なライブハウスだ。有名なイタリア人建築家が設計したというその鉄骨造のドームは、戦火にさいなまれ、火にくべた鳥かごみたいに黒くひしゃげた骨格だけの哀れなすがたとなっていた。

暮れはじめた風景に、それは負のエネルギーを帯電した魔物の巣窟みたいに見えた……

「お、おい……、何かずいぶんと不気味なところだな」

「やーだー、あたし、お化け怖いー」

「ばーか、違法薬物ドラッグさえありゃあ、俺たちに怖いモンなんてねーんだよ」

「でも、本当に、こんな所に兵器が隠されているのでしょうか……？」

その時、少女の頭上でまた光の文字が語り始めた。

「……あの建物の中に地下へとおりるための扉があります……今、そのロックを解除しました……でも、どうか気をつけてください……ロック解除と同時に防衛システムも作動したはずですから……」

「ぼ、防衛システムって……？」

「……ヴァルハラ軍事施設を守る100人の女性型戦闘用アンドロイド……猛り狂ったヴァルキューレたちです……」

「何だって！」

「きゃーっ！ 見て見て、何か変なのがゾロゾロ出てきたわよ」

かつて、資材搬入用に使われていた大きな鉄製の扉がその錆び付いた音を軋ませながらゆっくり開くと、古代ローマの戦の女神さながらに鋼鉄の鎧をまとい、いぶし銀の槍をかけたアンドロイドたちが、血のように赤いマントをたなびかせながらわらわらと飛び出してきた。

そして、聖地を侵す5人の存在をそのガラス玉みたいな瞳で認識すると、槍を振り上げ、口々に機械じみた野太い雄叫びを張り上げた。
ロック・オン

「うわーっ、こりや無理だ、ぜったい勝ち目ねえって……。あんなの相手にしたら命が幾つあっても足りねえぞ」

「数の上でも圧倒的に不利ですね……。というより無謀です。ここは大人しく引き返しましょう……」

「でもでも、このままじゃ地球が滅ぼされてしまうのよ。何とかして、あの施設の中に入らなきゃ……」

そう言って、4人は、またも一斉に【学級委員】を見た。

「な……。何で俺の顔ばっか見るんだよー」

「だって、あんた一応はリーダーでしょ？」

「うるせー！ こんな時ばかりリーダー、リーダー言いやがって」

そのとき、少女の頭上に弱々しい【コバルトブルー】の光が接触不良のネオンサインみたいに瞬いた。

「……はやく……はやく……私の命が尽きる前に……」

「あれ……？ このコって、もしかして……怪我してるんじゃない

かしら？」

【保健委員】は、慌てて少女のか細い体に手を這わせ負傷のあとがないか調べてみた。すると、タイトな銀色のワンピースに隠れて気づかなかつたが、彼女の背中には明らかに銃で撃たれたような深い傷があつたのだ……

「たいへん、大怪我してるじゃない！」

「……私の命が尽きる前に……はやく……」

「くそーっ！ もう、こうなったら行くしかねえ！ 敵を蹴散らして、何としてもこの子をあの地下施設まで運ぶんだ」

【学級委員】がアンドロイドの少女をタンデムシートに乗せながら言った。

「ちょっとみなさん、聞いてください。あの戦闘用アンドロイドたちと互角に渡り合える良い方法がありますよ」

不意に【図書委員】がみなに向かってOKサインを示した。その親指と人さし指の間には、赤紫色に輝くカプセルがはさまっていた。
「この幻覚剤ドラッグを使えば、僕らは無敵です」

「いやーっ！ いやいやいやー、あたしその幻覚剤ドラッグだけは、もう絶対やらない！ 冗談じゃないわ、もう下着の中グチヨグチヨなんだから！」

「でも、これを使った時の戦闘能力の高さは、あなたがさっき見せてくれた通りです。みなさん、試してみる価値はあると思いますけどね……」

「おい【図書委員】……、お前の造つたその幻覚剤ドラッグって一体何が入ってたんだ？」

【図書委員】は、えへんと胸を張った。

「一応、主成分にはLSDを使用していますが、その他にアルカロイド系、アンフェタミン系、トリプタミン系の薬剤をそれぞれ少量

ずつ混ぜています。あと微量ですがステロイド系ドラッグの成分も配合しました……。あつ、そうだ、試験的にマジックマッシュルームを入れてみたんですよ、あとベニテングダケも……。コカインも入れたかなあ……。一応、健康の事も考えて各種ビタミンとグルコサミンも……」

「もういい、もういい！ ようするに幻覚剤ドラッグのヤミ鍋だな、ひとをモルモット代わりにしやがって……」

その時、前方からワーツという喚声がおこった。

ヴァルキューレたちが槍を振り上げ一斉に突撃を始めたのだ。地面を蹴立てる激しい地響きと、鎧が力チャ力チャ触れあう甲高い金属音が津波のように大迫力で押し寄せてくる。

「きゃーっ、来たわよ来たわよー、【学級委員】ってば、どーすんのよーっ！」

「こうなったら仕方がない」

【学級委員】は、開き直ったように眼差しを強くすると輝くような【タンジェリン】でみなに言った。

「おい、みんな！ パーティー始めるぞっ！」

つつく……

第4話

まるで、

その地響きは、気紛れに迷い込んだ冒険者たちを蹂躪するケルベロスの群……

その雄叫びは、六百四十八万の戦星を率いて神の子を亡ぼそうとする夜明けのドラゴン……

その勇姿は、稲妻を振りかざして阿修羅の王に挑みかかる帝釈天の軍勢……

今、硝酸塩とダイオキシンの汚された大地を荒馬のように蹴立て、夕暮れの空を割れんばかりの鯨波に震わせながら、純銀の鎧に身を包んだ100人のヴァルキューレたちが長槍を突き出し、バイソンの群のごとく眼前まで迫っていた。この猛り狂った戦闘用アンドロイドには感情というものがない。

そこにあるのは、異物を排除せよという単純明快なプログラムのだけだ……

「行くも地獄、退くも地獄……、でも俺たちには違法薬物がある。こいつがある限り俺たちはいつだって天国までぶっ飛べるんだ！」

【学級委員】が手の平を下にして右手を差し出した。

「パーティー始めようぜ！」

「おう！」

その手の上に他の4人が順番に自分の手を重ねてゆく。円陣を組んだ5人は、燃えるような闘魂みなぎる【ブラッド・レッド】の光に包まれていった……

「よし、目的はあの女の子を無事に軍事施設まで連れていくことだ、ザコどもは蹴散らして一点突破しよう！ 行くぜっ！」

「よっしゃあ！」

まずは、やんちゃ坊主の【学級委員】とデブツチヨの【体育委員】が、背中の【ランドセル】にあるアダプターソケットに赤紫色の液体が充填されたドラッグ・カプセルを装着した。

……血中のアドレナリン濃度が爆発的に増加してマグマのように沸騰する。

「うおーっ！」

ズダダダダダダダダダダ！

怒濤のごとく連打されるツীবাসの重低音がハード・コア・パンク特有のアグレッシヴなタテノリ・ビートを刻みはじめると、フランクシャーを効かせた野太いギターがノイズで調子っぱずれなりフを繰り返し、下腹にひびくヘヴィなベースラインが大地をぐらぐらと揺さぶりはじめた……

ドラッグ ミュージック
違法薬物が、音楽を奏で始めたのだ！

「どけどけどけどけーっ！」

「死にてー奴は、どこからでも掛かって来やがれーっ！」

2人は、ゼブラ模様のサンドモータービルに積まれた排気量3000ccのディーゼルエンジンをフル回転させ、暴れ馬のごとく砂塵を巻き上げながら敵の真っ只中へと突っ込んで行った。

タコメーターの針がレッドゾーンに突入し、オイルの焼ける臭いが風に溶ける。

アイアン・メイデン
たちまち、長槍を構えた鋼鉄の処女たちが、餌に群がるピラニアのように襲い掛かってきた。

「ユー・アー・マザー・ファッカー！」

【学級委員】は、タンデムシートからスタインバーガーのギター

を取り出すと、オーヴァードライブ気味なギターサウンドにニトログリセリンを突っ込んでショットガンみたいにぶっ放した。

ズギヤアアアアーン！

数人の敵がボーリングのピンみたいに消し飛んだ……

「うおー、気持ちいいっ！」

「よーし、俺だって……」

うでに巻き付けていたバイクチェーンをヘリコプターのように振り回しながら、【体育委員】が群がる敵を次々と蹴散らしていく。突然、1人のヴァルキューレが彼の行く手に立ちはだかった……

彼には、敵の攻撃が音楽となって聞こえた。

「だあーっ！」

敵は、いきなりスラッシュ・メタルな叫びをシャウトさせながら流れるような16分音符の連続で超早弾きのギターソロを見舞ってくる。

唸るチャイナシンバル……クラッシュするギターノイズ……

【体育委員】は、これを豪快なダウンストロークではね返すと、力わざのボトルネック奏法でブルージーなギターサウンドの一撃を叩き込んだ！

ユイイイイイーン！

「がはあ……」

敵は、側頭から血煙を吹き上げながらスプラッター・サウンドの彼方へと消え去った……

「うひょー、最高ーっ！」

「…………じゃ、じゃあ……あたしたちも、そろそろ行く？」

「えーん、天国のパパ、ママ、ごめんなさーいっ！ あたし、もう絶対お嫁に行けない体になってしまっわ！」

キョートでコケティッシュな【保健委員】と超ブリっ子の【放送委員】が、それぞれ愛用のピルケースから取り出した違法薬物の力ドラッグプセルを、ピンク色の【ランドセル】にゆっくり挿入すると、全身を駆けめぐる快感に思わず切ないあえぎ声が漏れた。

「ああん……………」

と同時に、体中をまさぐるチョッパー・ベースの響きとカリビアンなシンセサイズド・ギターの音色が気怠いジャマイカン・ビートと溶け合って、その豊かな乳房や可愛いヒップをわし掴みにする。
やがて、ザイオンの地に眠るユダヤのライオンが黄金のたてがみを震わせながら予言の翼をゆっくりと広げはじめた……

突然、彼女たちの頭上にユダヤの虹であるラスタ・カラーで彩られた文字が太陽となって輝いた。

ジャAH！（神よ……）

その文字は、ラスタファリアン信仰を想起させるもう1つの文字を引き寄せた……

ジャ・メイク JAH MAKE……（神が造りたもうた世界……）

やがて2つの文字は性交して新たな文字を生み出した……

ジャマイカ JAMAICA！

唐突にフルボリウムのレゲエ・サウンドが2人の脳内に奔流のごとく押し寄せ、やがて彼女たちの精神をつかさどる脳内神経の大切な部分をつなぎ止めていたネジがプツン！ と音を立てて弾け飛んだ。

「イエー！ ハイレ・セラーシエーッ！」

「バック・トゥ・アフリカー！」

ユダヤの聖槍を振りかざしたザイオンのシスターたちは、キングストンの都へ向かって祈りを捧げたあと、有翼の獅子であるゼブラ模様のサンドモービルにまたがって約束の地へと疾駆しはじめた。

たちまち群がるバビロンの牝犬たち……

凶暴な西洋音楽の牙を剥いて挑みかかるバビロンの牝犬どもを、このマリファナに祝福されたドレッド・ヘアーの少女たちは、けたたましいサウンドシステムのDJで蹴散らしてからウィンクしてみた。

「RASTAMAN LIVE UP！」

カリブ海からの熱風がヤシの実を揺らす……

不意に、彼女たちの前方に偏見と人種差別の角を突き出したバビロンの猛牛が立ちはだかった。

地の底から沸き上がるような地獄の叫び声をしばらく出す。

「アイ・アム・W・A・S・P！」
ワッスル

しかしそれに怯むこともなく、ザイオンの少女たちは、エチオピアの王に敬虔な祈りを捧げたあと光り輝く炎の槍を疾風のごとく敵の心臓へと突き入れた。

「JAH NO DEAD！」（神は死んでいない！）

断末魔の悲鳴とともに視界から遠ざかる敵に色っぽい流し目を送りながら、彼女たちは失神するほどのオルガスムスを感じて思わず叫んだ……

「あーん、超気持ちいいっ！」

戦いの舞台へと身を投じる4人の姿を見送りながら、チビで頭でつかちの【図書委員】は、深い溜息を吐いた。無責任なことに、彼

は、この危険きわまりない薬物を自分自身の体で試した事がなかったのだ……

「うーん、失敗したなあ……、こんな事になるなら幻覚剤なんて造るんじゃないかった……」

その小さな背中に【ランドセル】を背負う姿は、まるで二宮尊徳のようである。

「僕は、生まれつき肉弾戦には向いてないんだけどなあ……」

そう【オーシャン・ブルー】な独り言をつぶやき、しばらく躊躇していた彼は、やがて諦めたようにかぶりを振りながらそっと自分が造った最高傑作を背中の【ランドセル】に装填した。

「……………え？」

リュウアアアアアーン……

それは、原初の海に浮かんだ蓮の花より発せられたシタールの響きだった。

宇宙の起源たる黄金の卵より生まれ出た創造主が、光り輝く真言とともに発した最初の音である。

「……………何だろう、この湧き上がる力は？」

彼の両脇には、象頭の神であるガネーシャ神と美しい天上の楽師であるサラスヴァティ神が静かに結跏趺坐していた。やがて、幻覚剤は、宇宙の神秘にみちた天上の音楽を奏で始める……

大聖歡喜天が奏でるムリダングムのパーカッシヴな響きがガムラののようなオリエンタル・リズムを刻みはじめると、ガンジス川のせせらぎにも似た美しいヴィーナの音色が弁才天女の白い指先から漏れ出す。その音楽に合わせて半獣半神のガンダルヴァが唱い、麗

しいアプサラスたちが妖艶に舞い躍った。

やがて、ヴァースキ竜を首に巻いたシヴァ神がヒマラヤの山頂よりその猛々しい勇姿を現し、神々の祝福を集めてつくったという真言^{マントラ}を發した……

^{スヴァーハ}SVAHA！

戦え！

たちまちシヴァ神の額より英雄クリシュナが出現し【図書委員】の体に憑依した。

神懸かりとなった【図書委員】は、炎の馬が曳く戦車に乗り込むと、右手に三叉戟^{トリナーカ}、左手に円盤^{チャクラ}を持ち、眉間に現れた第3の眼からレーザー光線を放ちながら、血に飢えた羅刹女たち目掛けて突進した。

羅刹女は食人鬼だ。

墓場から掘り起こした屍よりも生きた人間を食することを好む彼女たちは、思いがけず飛び込んできたご馳走に狂喜すると、舌なめずりしながら血濡れた肉斬り包丁を振り上げ襲い掛かってきた。

すかさず【図書委員】の左手から、光り輝く3つの円盤^{チャクラ}が次々と放たれる。

^{ダンダ・チャクラ}神聖な円盤

^{ダルマ・チャクラ}正義の円盤

^{カーラ・チャクラ}運命の円盤……

これら3つの円盤が大気を切り裂きながら縦横無尽に飛び回り、逃げまどう羅刹女たちをまるでダイコンでも切るように刻んでいった。断末魔の悲鳴が四重唱^{クアルテット}になる……

追い詰められた数人の羅刹女が、血を吸った大地にひざまずき暗黒の神に祈りを捧げた……

Camunda！ 恐怖を与えるものよ！

突如、大地が揺れた。

辺り一面に黄色い砂埃が舞い上がり一切の視界がうばわれた。

やがて【図書委員】の眼前に、全身の皮膚がコールドタールのように黒い4本腕の地母神が出現した。

彼女は、1本の手にてチェーンソー、もう1本の手に鮮血したたる巨人の生首をさげ、残り2本のうでを高々と天空へ掲げていた。そして髑髏のネックレスをぶら下げた首をゆっくりめぐらせ、【図書委員】と目が合うと真っ赤な舌をぺろっと出してけたたましく笑った。

キヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ……

充血した3つの目が大きく見開き、やがて手にしていたチェーンソーが勢いよく回転しはじめる。

ドッドッドッド　　ギューイイイイイイーン

辺りの空気が震撼した……、視界がゆがむ……、漆黒の血母神は、凶暴な唸りを上げるチェーンソーを豪快に振り回し、あっと言う間に3つの円盤を叩き落としてしまった。

さあ、次はお前の番だよーっ！

彼女がデス・メタルな叫びとともに襲い掛かってくる。

【図書委員】は、敵の執拗な攻撃を巧みなサンドモーターの操縦によりかわしていったが、ついに避けきれなかった一撃を右手の三叉戟で受け止めた。その衝撃で、この聖なる武器は柄の部分から真っ二つに折れてしまったのだ。

「これは、まずいぞ……」

死ーねえーっ！

リュウアアアアアーン

澄みわたった湖面にひとしずくの水滴を垂らしたように、神々しいシタールの音色が【図書委員】のいる場所を中心としてゆっくり波紋を拡げた……

と同時に、水蓮の上で瞑想にふける一角仙人が姿を現し、その口から次々と真言が^{マントラ}発せられたのだ。

k h a m ^{キヤ} (自在な空！)

h e t u ^カ (原因の風！)

r a v i ^ラ (太陽の塵！)

v a r i ^{ヴァ} (円形の水！)

b h u h ^{ボツ} (不生の地！)

5つの真言は、光の宝珠となって黒い血母神のまわりをぐるぐる回り、最後に溶け合って1つの眩い閃光となった。

それは金剛界より顕現した大日如来の真言だった。

v a m ^{ヴァン} (光輝く者よ！)

「ぎゃああああ……」

黒い花は、燃えて灰となった……

やがて、天上の音楽が止んだとき、そこにはおびただしい数の羅刹女たちが死体となって折り重なっていたのだ……

つづく……

最終話

立ちほだかるヴァルキューレの軍団を蹴散らして強行突破をはかる5台のサンドモビルが、やがて崩れかけたモスクの入り口までたどり着くと、アンドロイドの少女が頭上に光のオブジェを瞬かせて話しかけてきた。

それは、消えなかった線香花火みたいに弱々しい光だった……

「……あそこに見える……神像の下から……地下に入ることが出来ます……」

少女の視線のさきには、円形闘技場アリーナを模した巨大なライブステージのおくに、古代ゲルマン・ケルトの神話に出てくる軍神が雄々しく佇立していた。そして、その巨大なブロンズ像を支えるコンクリート架台の裏がわには、鋼鉄の扉が黒い口を開けて【学級委員】たち5人をじっと待ち受けていたのである。

「よし、あそこに入るぞ！ 【体育委員】は、俺と一緒にこの子を運ぶのを手伝ってくれ」

5人は、サンドモビルを乗り捨てると、追いつがる敵を振り払いながらその扉めざして全力で走った。重たいアンドロイドの少女をかついだまま何とか入口の内へとすべり込むと急いでその扉を閉じる。体当たりしてきた敵の槍先や拳がその鋼鉄製の扉に次々とめり込むのが見えた……

「よし、振り切ったぞ……」

「あとは、この女の子をこの先にある地下施設へと連れていくだけだ」

地下へと続く狭い階段の下からはカビくさいエアコンの空気がもれ出し、ひんやりと5人の顔をなめた。そのうす暗い石畳の階段を

慎重に下り両開きの自動扉をくぐって中に入ると、そこは宇宙船のコックピットみたいにモニタや計器類が整然とならんだコントロールルームとなっていた。

「……お願い……部屋の中央にあるコントロールパネルの前に……私をすわらせて……」

彼女が弱々しく指さす先には、まるでレコーディングスタジオのミキサールームみたいに様々な操作スイッチで埋め尽くされたブースがあった。【学級委員】と【図書委員】は、アンドロイドの少女をそこまで運ぶと静かにイスに座らせた。

「これで、いいのか？」

「うん、ありがとう……」

少女は、苦しげに身をおこすとすぐに震える指でキーボードを叩き始めた。次第に、計器類の横に並ぶインジケータランプが赤く点灯しはじめる……

そのとき突然、【保健委員】が悲鳴をあげた。

「きゃーっ！ 何よ、あれ！？」

全員が一齐に【保健委員】の指さす先、部屋の奥の暗がりを見た。そこには……【暗黒】が【闇】をまとって立っていた。

それはまるで、アフリカ奥地に脈々と受け継がれる呪術的な土俗主義を象徴する生ける死者のように……、あるいは猛毒テトロドキシンにおかされ魂の抜け殻となった黒人奴隷のように、全身で【死】と【セックス】と【ユーモア】を体現していた……

どこからともなく、ジミ・ヘンドリックスの V O O D O O
O C H I E L E が聞こえてくる……

「やっぱりなあ……、いると思ったんだ」

「いわゆる、ラスボスってユー奴ですか？」

それは、たしかに大型の戦闘用アンドロイドに違いなかった。

しかしその異様な外観は、見るものにもつと禍々しいある種の黒魔術的な存在感みたいなものを印象づけた。

黒い背広に……黒い眼鏡……、黒の山高帽と……そして黒檀で造られたステッキ……

それは、ヴードゥー教の黒い死神、バロン・サムデイの姿にほかならなかった。

その死神は、まるでアナコンダのような感情の通っていない眼で5人を見ると、枯れ枝のような指でゆっくりと十字を切った……

F a t h e r , S o n , H o l y S p r i t , …… A ・ M ・
E ・ N 父と子と聖霊の御名において、……アーメン

その低い声は、地獄の底から沸き出したような身の毛のよだつものだった。と同時に、辺りに紫の煙が立ちこめ、その中から異形の者たちが次々と姿をあらわしたのだ。それは、トントン・マクートと呼ばれる死霊^{ゲデ}の戦士たちである……

「なによー、あれ……？ 気持ち悪いー」

「ねーねー、どうするの？ あたしたち、もしかしてあんなのと戦うの……？」

不安の【青】でささやき合う【保健委員】と【放送委員】の精神は、すでに死神の放った呪縛によって金縛りにあっていた。それは、まるでFAZZで歪ませた野太いギターサウンドがいつまでも耳のおくに残ってしまうように彼女たちの中枢神経にべつとりと絡みつき、蜘蛛の網に絡まった蝶みたいに身動きを封じてしまっていた。

「ねえ、どうしよう！ あたしたち体が動かない」
「待ってろ、いま助けてやつから！」

そう言っただけ彼女たちに向け寄ろうとする【学級委員】に向けて黒い軍服を着た死霊の戦士たちがマシンガンを放った。それは、真っ赤なレスポールからしぼり出されるブルージーなサウンドの嵐だった。

た。

「わあっ！」

攻撃をまともに食らった【学級委員】は、衝撃を受け止められずに部屋の隅まで吹っ飛ぶと、壁に激突してそのまま冷たいフロアタイルの上に転がった。

「大丈夫ですか？」

「……大丈夫じゃないけど……大丈夫……。そんなことより、早くあいつを倒すんだ」

【学級委員】は、壁にもたれながらよろよろ立ち上がると、黒い死神を下から睨み上げるようにして声をしぼり出した。

「いいか……、ザコどもは放っておいて、まずあの黒ずくめの野郎からやつつけるんだ。そうすりゃ、あとの連中はどうにでもなる」

「よ、よーし……」

【図書委員】は、呼吸をととのえると印契^{ムトラ}を結び死神に向けて真^{マシ}言^{トラ}を放った。彼の耳にシタールの幻想的な音色がよみがえる。

リユアアアアアーン

^{ドヴァン}dhvam!

(除悪!)

彼の両脇には、いつの間にか象頭のガネーシャ神と美しいサラスバティ神がひかえ、天上の音楽を奏ではじめていた。

しかし……、

死神は、笑った。

その、粘土で出来たような血の通っていない相貌をゆがめてニタリと笑ったのだ。

不意に、暴力的なデス・メタル・サウンドが鳴り響いた。そして美しい天上の音楽は、その大音量のノイズを前にして、砂の城が波にさらわれるように跡形もなく消え去った。

ES・A・ZU （漆黒の法衣をまとった地獄の賢者……）

冥界へとつづく洞穴のような死神の口から禍々しい聖句が放たれた。一瞬、油を浮かべた水みたいにサイケデリックな彩りの光芒が揺らめき、次の瞬間には、跳ね飛ばされた【図書委員】の小さな体がバトミントンの羽みたいにな放物線をえがいて宙を舞った。

「そんな……」

そこにいた全員が【真っ赤】な恐怖心の檻^{おり}につながれた……

「……あいつは……あいつはアンドロイドなんかじゃない！ 正真正銘の死神だ！ 俺たちの肉体を破壊して魂を喰らうつもりなんだ！」

幻覚剤による酩酊^{ドラッグ}状態は、快楽だけでなく恐怖をも助長する。5人のジャンキーたちは、腐敗した体内にメタンガスがたまつてゆくように、徐々に全身を満たし始めたどす黒い恐怖心にあえいだ。そんな彼らを見て、黒ずくめの死神は、乾ききつて幾筋ものひび割れを刻み込んだその生気ない唇をうごめかせて、さらなる聖句を飛ばした……

ERIM・ANNI （こうもりの翼を生体移植した禍々しき天使の軍勢……）

グードウーの言霊とともにギターノイズがフィードバックし、衝^{ツクブム}撃波^{ソニ}となつて部屋中を駆けめぐった。

「うわーっ！」

「きゃあ！」

5人は、打ちのめされて床に這いつくばった。メデューサの瞳で石にされたように恐怖で足がすくんだ。まるで砂が入り込んだように関節がぎしぎし痛む。口の中を塩辛い血の味が満たしていった……

【学級委員】が苦痛に呻きながらもやつとの思いで首をめぐらせると、中央のブースではアンドロイドの少女が熱にうなされたよう

にハアハア喘ぎながらも必死にキーボードを叩いているのが見えた。
そんな少女の姿を、黒い死神の視線がゆっくり捉えた……

あの子を守らなくちゃ……

「みんな、聞いてくれ……。バラバラに戦ってちゃダメだ、僕たちの心を一つにしよう。精神をシンクロさせるんだ」

「そ、それって……どうやるの？」

「まずドラッグの効き目を強くしてみよう、パワーブースターを作動させてくれ」

全員が手さぐりで背中の【ランドセル】にあるブースターのスイッチをONにすると、モーターヘッドの甲高い唸りとともにタービンが回転し、彼らの気管へと送り込まれる幻覚剤^{ドラッグ}の量がしだいに増えていった。

「あああつ！」

「ヤバイよ、これっ！」

5人の目の色が尋常ではなくなった……

今までに味わったことのない凄まじい快感が5人の体を突き抜け、電気ショックによる蘇生処置を受けたようにその体が跳ね上がった。

「よ、よーし……それじゃあ、これから『第九』を使ってみんなの精神をシンクロさせるぞ」

「……『第九』？ ベートーヴェンの『第九』ね……でも、どうやって？」

「みんなが一緒になって、あの合唱の旋律を心の中に思いえがくんだ」

全員が力強くうなずいた。

「うん分かった、やってみよう！」

「歡喜の歌ね！」

5人は、ぎゅっと目をとじた。

そして、第4楽章で繰り返されるあの印象的な主題を心の中で必

死になぞった……

やがて、ドラッグに含まれる覚醒物質が彼らの神経細胞に強く作用し、異常に研ぎ澄まされた聴覚が彼らの精神にありもしない幻の音楽を奏ではじめた。

それは最初、がんぜない幼女が口ずさむ、たどたどしい鼻歌だったが、やがてその歌声に、2人、3人と別の歌声が重なり、さらには十人になり、百人となり、そして千人となった……

その合唱は、次第にスケールを増してゆき、一万人を超え、十万人を超え、そして最後にはトスカニーニ指揮によるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団をバックに、百万人を超える大合唱となって彼らの耳に洪水のように押し寄せたのである。

ああ、聞こえるぞ…… 歓喜の歌声だ……

その瞬間、5人の精神は、この『第九』の合唱を媒介として見事にシンクロしたのだ！

死神が、アンドロイドの少女に向けてブードゥーの聖句を放った。

AN・KI・BI・DA・GE （7つの天と7つの大地と7つの地獄を焼き払う森羅万象の業火）

それは、たちまち紅蓮の炎となり、翼を持った巨大な髑髏の姿となって無防備に腰掛ける少女の身に容赦なく迫っていった。しかし、この無垢な少女は、まったくそれに気付かず、ただ一心に自分の使命を果たそうとしている。

やがてその禍々しい業火がついに少女の小さな体を焼き払うかと思われた瞬間、不意に5人のジャンキーたちがその前に立ちはだかった。

彼らは歌った。

Freude! (歓喜よ!)

それと同時に、百万人の大合唱によるベートーヴェンの【第九】が、死神の放ったギターノイズをかき消していった。

Freude! (歓喜よ!)

やがて禍々しい髑髏の化け物は、立ちこめた夜霧が朝陽によつて追い払われるように消えていった……

「ウウ……、オノレ」

それまで魚眼のように光を持たなかった死神の双眸が、はじめて憤怒を露わにして5人を睨みつけた。ワナワナと怒りに震える腕で黒檀のステッキを振り上げ、アバドンの審みたいに口を大きく開く

……

「恐怖に負けちゃダメだ」

「うん、わかつてる」

【保健委員】と【放送委員】のメゾソプラノが、春野にたわむれる小鳥たちのさえずりを歌った。

Tochter aus Elysium 楽園からの少

女よ!

「グワア!」

死神の左腕が千切れとんだ。

【体育委員】と【図書委員】のバリトンが、夏の夜空を埋めつくす星々の煌めきを歌った。

Wir betreten feuertrunken

我らは情熱にあふれて!

「ヤ、ヤメロオ!」

死神の右足が吹き飛ばされた。

【学級委員】のテノールが、秋の田園にたゆたう稲穂のさざ波を歌った。

Der Cherub steht vor Gott

天使は、神の御前に立つ！

「ヤメテクレエ！」

死神は、ついに両足を失い床に転がった。そしてその憎悪に満ちた目で天井を睨みつけながら、最後に残った枯れ枝のような右手を震わせて十字を切った。

A M E N！ (アーメン！)

最後の言霊は、戦死者たちの魂となつて激しく渦を巻き、5人に向かつて猛然と襲い掛かつてきた。それは、人類が太古の昔から連綿と繰り返してきた憎しみや争い、そして悲しみの歴史が生んだ怨嗟の声に他ならなかった。

「……滅ビヨ、カインノ娘達ニ誘惑サレ墮落シタ、罪深キ者ドモ」
「うるせー！ てめーなんかさつさと死者の国に帰つて、死体相手に『かんかん』でも踊つてやがれ！」

5人は、声を合わせて歌った。その歌声は、人類が長いあいだ忘れていた地球への愛、同胞への愛、神への愛に満ちあふれていた。

Himmelsche, dein Heiligtum

天国に、汝の聖殿に踏み入ろう！

「……………アア」

死神の体は、まるで高山の残雪が春一番に吹きさらされ、しだいに溶けて溪谷の急流へそそいでゆくように、ゆっくりと消えはじめた……

百万人の大合唱は、今や最高潮に達している。

Seid umschlungen, Millionen

相抱かれよ、何百万の人々よ！

「……………アアアッ」

その歌声は、毒された大地に神秘の血清をそそぎ込んだのだ！

相抱かれよ、何百万の人々よ！

死神が消えた……

U S W J a ' w e r a u c h n u r e i n e S e e l e
 そうだ、地上にただひとつの魂を！

かわりに、部屋の中を神々しい慈愛の光が満ちていった……

喜ぶ！)

……そしてその瞬間、死にかけていた大地がゆっくりと息を吹き返したのだ。

やがて【第九】の合唱が終わり、室内を満たしていた眩いばかりの光が消えると、5人のジャンキーたちは、腑抜けたようにその場にへたりこんでしまった。

そして、あの少女は……月から地球を救いに来た美しい少女は、安らかな笑みをたたえたまま、ひっそりと息絶えていた……………

雲の去った宵の空を、2羽の白いカラスが天にむかつて駆け上がったのは、それから間もなくのことだった。

フギン
思念と記憶
ムニン
……

その2つの白い光芒は、オールト雲をたなびかせながら大気圏を

突きぬけ、一直線に月へと吸い込まれていった。

程なくして、乾いた月面に火柱が立った
最終兵器^{ドラッグ}が、着^{シヨ}弾^{ツト}したのだ。

やがて月は……、
ミュージック
快樂に満ちた音楽を奏で始めるだろう……

さあ、パーティーの続きが始まるぜっ！

……その日、日は黒布のごとく翳^{かげ}り、月は血のごとく染り、空の
星は無花果^{いちじく}の実の、いまだ熟れざるに枝より落つるがごとく地に落ち
ちかかり、地上の王たちはそのさまを見て恐れおののくであろう……
(オスカー・ワイルド『サロメ』より)

化石ドラッグ 完

最終話（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

むかし観た『クロスロード』という映画で2人のブルースマンがギターで対決するシーンがあつて（敵役は何とステイブ・ヴァイ！）それがとてもカッコよくて、いつか音楽によるバトルを小説にしてやろうとずっと思っていました。でも、今回これを書いてみてつくづく思ったのですが、音楽を文章で表現するのって難しいですね。書き始めた当初、ぜったい擬声語は使うまいと心に決めていたのですが、途中でボクの筆力じゃムリということが分かりました。そーゆー意味ではとても勉強になったと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9772e/>

化石ドラッグ

2010年10月13日13時08分発行